
薄明ウォルンターズ

蒼乃 薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薄明ウォルターズ

【Nコード】

N0632Z

【作者名】

蒼乃 薫

【あらすじ】

それでも、僕は守ると約束した――。八年前の内乱のさいに記憶と両親を失った少年・ティオは何も思い出せないとしても、双子の妹・ディアや友人たちと故郷で平穏に暮らしていた。しかし、集落の祭りを前にした日。千年前に邪神から世界を救った聖女神を祭る遺跡で、もっとも忌み嫌われる力を持った少女と出会う。それはディアが持つ、世界を救った聖とは正反対の邪の力。だが、彼女は自分自身のことすら何も知らない迷い子だった……。これはすべてを巻きこむ、あまりにも純粋な想いから始まった……。だれもが幸

せを願い、大切な想いをあきらめなかった意志物語。その転換期
―― a u o n e G R E R にて同タイトル同名義で公開して
います。こちらでは一節分まとめあげしていますので、G R E E の
方が更新速めです。

Will:0 どうしようもない世界で —— それでも（前書き）

初めまして、蒼乃です。つたない文章、自己満のファンタジーですが少しでも楽しんでくれたら嬉しいです。また一応プロを目指している身なのでアドバイスなどがあると助かります。

昔から自分の中で描いてきた思い入れのある世界と物語なので、更新は亀なみにのろのろになりますが、どれだけ間があこうと何があろうと最後まで書きつづけるつもりです。最後になりますが、興味持って手にとってくださった方へ、ありがとうございます。読んでくださる方、これからもよろしく願います。

Will:0 どうしようもない世界で —— それでも

それは、すべての叫びを体現させたような大雨だった。

死んでいく者の絶叫。

傷ついた者のうめき。

狂いし者の怒号。

悲しむ者の嘆き。

岩肌を打ちつづける大きな雨粒の音がさまざまなノイズを引き起こす。耳にこびりつくほど聞いて、そしてそのたびに聞き流してきた想いが蘇がえる。

それをひとり、傘をさすどころか外套すらまとわずに少年は聞いていた。顔に張りついた夜色の髪から染み出た水滴が涙のように頬に流れ落ちる。

苦しくはなかった。とうの昔に慣れてしまったものだから。

朱い目を不気味に細め、けらけら笑う。

「ねえ、どうして君らはこんな世界にしたの？」

ごろごろ転がる肢体に目を落とす。

雨は岩肌以上に冷たくなる運命しかない肌を濡らしつづけていた。登山道はもはや簡単には洗い流せないほど血肉に溢れた？人？の道で、立っていたのは無傷の自分ひとりだけ。

白い鎧で身を包む人も黒いローブを身につけた人も例外なく倒れ、身動きひとつとらない。すでに絶命しているか、その一歩手前のまです助からない状態。彼らの武器はすでにその手から離れ、刃の破片が石ころと一緒に散らばっていた。

世界は冷えていく一方で。

「君らは、こんな世界にしたかったの？ こんな世界を望んだの？」

ねえ？」

少年はさらに笑みを歪める。

視界の端の遠くで雨に逆らって立ち昇る黒々とした煙と赤く燃える大地が見えた。はるか彼方でけたたましい本物の叫びを背景に、激しい刃の打ち合いに銃撃、魔光がやむことなく繰り広げられている。

すべてがもう終わることは違う。拡大する五感が捉えたのは、今この瞬間にも終わりを一方的に押しつける戦争の光景だった。

「狂人、が……何をほざく……ッ！」

静まらない雨音以外の音に体は正直に震えた。

予想だにしていなかった返事に笑みが反射的に引き、だが少年はゆっくりふり返る。

その人間は若くもなく、老いてもいない男だった。全身傷だらけ。立派だった白い鎧は壊れて機能をまったく果たしておらず、混ざった泥と血でひどく汚れている。傷ついてなお死体の中から立ち上がり、鋭い目と刃こぼれた剣を自分に向けた。

立てるはずのない怪我を負いながら、彼は自分の信念を貫こうとしている。

まっすぐに、強靱な意志。

「狂ってる……ああ、そうかも。なら君らもそうだね。自分と同じ狂人だ」

「愚弄するな……これはすべて、我らが神と、この地の民のためだ。貴様とは違うッ！」

「うん、間違った。狂信者か。気の毒だよ。君らの信じる神なんていないのに……残念。君は失敗した。弱者だ」

どんな言葉も意味がないのはお互いさまだった。

騎士は駆ける。足は止まることなく動きつづけ、ふたりの距離は一気に縮まり—— 剣がふり上げられた。

少年はそれを見て笑う。笑って、けれど両手に持つ二刀は構えな
いまま。

「だから、死んで」

剣が振り下ろされる、もう防御すら間に合わない瞬間に口だけを動かす。

それですべてが終わった。

勢いついていた剣は霧が散るように消失し、騎士の体は大量の光る半透明な刃によって空に縫いつけられる。急所をひとつも逃さない必殺に絶叫はなかった。無様な声ひとつもらせない。

「消える……！」

そして、少年はすでに死が決まったそれに二刀をふるった。滅多刺しと滅多斬りが止まらない。嘲笑が浮かびあがり、笑い声が濁った奥底から溢れつつける。

白い剣は血をきれいに吸い取り、黒い剣は血を不気味に輝かせてそうしているあいだにも、近くで、遠くで、呆気なく人は死ぬ。数える意味がなくなるほどに死んでいく。

気づけば付近には分別のつかない肉塊しかなかった。
体突き動かしていた熱が急速に冷え、剣が手から落ちる。

「あはは……アは、ハ……ほんと、救いようのない話」

平穩に生きてきた普通の人々が、欲深い弱者の身勝手に犠牲になる。

それがあたりまえのように行なわれている世界を憎悪していた。以前はまだ、その中でも希望を持っていた気もする。それも消えてしまった遠い過去の話だ。

世界はいつまで経っても無慈悲なまま、変わらないどころかさらに悪化しておかしな方向に突き進んでいく。

もはや憎悪することすら無駄だった。世界は劣悪で醜くて、どうしようもないそういうもので、もうどうでもよくなってしまった。世界を、あきらめた。

「いつそ、こんな世界なくなってしまうばいいのにね、セリアシレン—— 聖女神」

ぼつりと天に向けて神の名前をもらす。

救いを求めるわけでもなく、感情のない言葉を淡々と吐き出した。

「君自身が願い、自分を貫いて守った世界がこの馬鹿らしさだ。なのに、なぜ君はまだ…… なんて、まだ…… どうして」

口を開く。閉じて、また開く。だが、一度止まった言葉はどうあがいてもそれ以上先へ続かない。

顔が歪んだ。そこにはもう壊れた笑みはない。泣きたいのに泣けない、どうにもできない傷をどうしたらいいのかわからない子どもの顔を浮かべ、唇を噛みしめる。

なぜ、こんな惨めな気持ちになるのかわからなかった。

「帰ろ…… もう、どうでもいいや。こんな、弱者の世界なんて」

そんな気持ちを抱きながらも力の入らない足を無理矢理前へ動かす。

水たまりを、血肉を踏み荒らすが、汚れも道德心もどうでもいい。

帰る場所なんてもうどこにもないけれど、剣を拾い、ただ足を進めた。

ここではないどこか、自分が望むたつたひとつの世界へ。

すべてがどうでもよくなった、どうしようもない世界で――

それでもどんな理不尽すら越えてみせると決めた、ゆずれない想いと願いを抱いて。

それだけが冷えた世界で生きていられる、唯一の熱だった。

Prolog なにもない、はじまり

空が泣いていた。

悲鳴を体現させた雨音と、壁の向こうに蠢くうめき声が朦朧としていた意識に染みてくる。それに漠然とした不安がひっそりと近づいてくるのをベッドの上で感じながら、少年は光のない目で黒い天井を眺めていた。

ベッドわきのランプでは部屋の半分すら照らせず、天井には一筋も届かない。

世界に、光が満ちることはなかった。

それでも光は少年の小さく幼い体を照らす。毛先が鈍く金に輝く茶色の髪と濁った青い瞳。血の気のない白い腕に刺さる点滴の針が冷たく光っていた。

「何か……何かきみのほうから訊きたいことってある？」

女性の声に視線がゆつくりと落ち、青緑の瞳と目があつ。

首を横に力なくふった。次の瞬間には視線は目から離れ、定まることなく辺りを漂う。

死の気配と重たい空気が容赦なく力の入らない体にのしかかる。怖い、とは思わなかった。

どうしようもなく落ち着かない一方で、動こうという至極あたりまえな思考にはたどり着かない。いつそのこと眠れればいいのにと思いつのに、ぎりぎりのところで無理矢理起こされているような、眠ることを許されていないような——そんなだるさが体中を回っている。

「困ったなあ……」と、彼女の言葉が重たい空気に上乘せされた。

「原因は頭の怪我か、精神的なものか……どっちにしろパツと治せ

るものじゃないし、こんな状況だと専門家に見せるのもムリそうだし……知能障害までいつてないといいけど」

好き勝手につぶやいているだけの、会話にならない一方的なやりとり。そんなどうでもいいことはわかるのに、憐れみに満ちた言葉が何を意味しているかはわからなくて。

すべてがあつさり流れて、分類されることなく底にたまっていく。不安も、だるさも、言葉も、音も——何もかもが、ただそれだけのものだった。

だから、何もせずにゆつくりと流れる微睡む時間に身を任せる。

「命が助かったぶんマシなんだろうけど……どっちにしろ、？あの娘？はしばらく遠ざけておいたほうがいいかな、これは」

（あの娘……？）

だけど、ぼやけた意識にその一言だけが消えることなく引っかかった。あの娘、あの娘、あの娘……頭の中で言葉を繰り返す。

けれど、それだけ。到着点そのものをなくしたように思考はその先にたどり着けない。それでも少年は何も思いつかないまま、感じないまま繰り返す。

あの娘とはいったい——

「……だれ………？」

無意識のうちにかすれた疑問がもれてた。

自分の頭にすら届かない声。しかし、それに応えるように暗い部屋に一筋の弱い光が入りこんだ。

「すみません、ティオは……」

「げえ」と、女性がもらした品のない言葉が耳をかする。
隙間から覗く少女の澄んだ青い瞳と目があった、気がした。彼女の言葉は続かない。潤んでいた目が見開き、たまっていた雫がほおに流れ落ちる。

「ティオッ!？」

泣きかけの顔が輝いた。

女性の対応を待たないで少女は部屋に飛びこむ。勢い任せに開けた扉をそのままにまっすぐベッドに駆け寄った。一歩ずつ笑みが深まり、雫は涙に変わって溢れつつける。

通り過ぎる彼女を女性は止めなかった。

行き場をなくして空をさ迷う手をさらにのばすことを躊躇し、深いため息を吐き出して手を下ろす。視線をそらせずにいる顔はけっして明るいものではなく、歪んで。

「無事、なの……よかった……!　ほんとによかった……ティオ」

気づけば少女の顔はすぐそこまで迫っていた。

輝く金色混じりの茶髪に青い瞳　——　自分によく似た顔。彼女は何度も名前を大切そうに繰り返して、とても優しい言葉を並べて、あたたかくて、いいなと心の底がほんの少し揺れ動く。

それに奇妙な違和感まで感じてしまった。矛盾を、おかしいと意識してしまった。

それは流してはいけない何か。なのに気づいた瞬間、はつきり見えたものすらあやふやになって、つかめなくなつて、頭の中の少女の姿がにじんでいく。

「あ、あ……れ？」

「ティオ、どうかしたの？」

首を傾げ戸惑う少女の肩に女性が静かに手を置いた。

「ディアちゃん……ティオくんは目覚ましたばっかなのよ。だから今はゆっくり休ませてあげて、ね？ お話はまたあとでもできるじゃない」

「で、でも……わたし、言わないといけなことが」

必死に訴える少女に彼女はさらに顔を歪め、苦しそうに言葉を吐き出す。

「ごめんね。今は、本当にダメなのよ」

そのまま問答無用で少女は腕を引つ張られ、小さな悲鳴をもらした。ちらちらと名残惜しげに自分を見ながらも、おとなしく彼女は従ってついていく。

小さな背中が遠ざかる。

その背に「ディア……？」と手をのばすようにつぶやいた。彼女の足が止まる。ふり向いたその顔は笑顔で、入ってきたときよりも何倍も嬉しそうで。

「ティオ、またあとでね」

それに何か言うべきことが、彼女に訊きたいことがあると思えた。口を開く。声がもれる。けれど、言葉にならない。

それはすぐに消えてしまう泡のような疑問だった。あやふやな思いは形にならない。形にする方法を知らない。この名前もわからない。

代わりに「ディア」と、その言葉を再び口にする。

それだけで少し気持ちが暖かくなって、それにさらに違和感が増

す。

「……ティオ、どうしたの？」

立ち尽くしていた少女が女性の手をふり払って駆けよってくる。点滴の存在なんて忘れて手をのばした。その手を迷わず彼女は握ってくれて、「だいじょうぶ？」と繰り返す。

暖かった。それだけでいいと思えるぬくもりだった。だから、だからこそ、わからなかった。

どうして少女がこんなにも優しくしてくれるのか、自分は知らない。この幸せな気持ちの出どころも検討がつかなかった。

とめどなく浮かんでくる疑問に世界が少しずつ鮮明になっていく。一力所にたまって固まっていた要素が明確に分かれ、ひとつひとつ形になる。

ようやく根源の疑問の正体に気づいた。

「きみ、」

「ティオ？」

彼女が言葉にしつつける名前の意味に気づけないまま、自分の意志で言葉を紡ぐ。

「……きみ、だれ？」

何気ない疑問。

少女の顔が凍りついた。

+

僕は何も知らなかった。

内乱に巻き込まれたことも。
自分が死にかけたことも。
両親が殺されたことも。
少女が妹であることも。
ひとつ残らず、何もかも忘れてしまっていた。

——そして、時間は戻らずに……気づけばなくしたものと同じ
だけ、月日は流れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0632z/>

薄明ウォルンタース

2011年12月2日14時52分発行